会　報　40　　白鷹町史談会

史　　談

2015（H27）　　１０．１２

■　平成２７年度研修旅行

本日は、白鷹町史談会の研修旅行です。

今回の白鷹町史談会研修旅行は、①東北の仏教の始まりの地といわれる福島県勝常寺、②深山観音堂の本尊の姿が偲ばれる恵隆寺立木観音、③白鷹町大瀬の五十公野氏の故郷ともいわれる新潟県新発田市五十公野（いじみの）城址と新発田城、という「根源(みなもと)」を訪ねる旅です。どうぞ、お楽しみください。

（参考）大瀬の五十公野氏のこと

守谷英一

白鷹町の北端、最上川の東岸の「大瀬（おおせ）」は、近世においては上杉藩の領地である置賜と他藩の領地になる最上（村山）の境で、大瀬はそのために、上杉支配の時には人の出入りや荷物の出入りを監視する本口番所が設置されていた集落である。

この集落には「五十公野（いずみの）」という姓を持つ家が多い。1996 年の『ゼンリン住宅地図　西置賜郡白鷹町』では、大瀬地区には 20 軒あり、そのうち９軒が「五十公野」姓である。

「五十公野」という姓は、全国でも珍しい姓で、しかも難読の姓でもある。類似のものを歴史的にたどってみると、新潟県の五十公野（いじみの）氏に行きあたる。

インターネット百科事典「ウィキペディア」によると、「五十公野氏は、新発田氏の一族で、戦国時代には後の新発田重家が五十公野治長と称して家を継いでいたが、天正８年（1580年）、兄・新発田長敦の死により新発田氏に戻って家を継いだ。そのため、新発田重家の妹婿・長沢道如斎が、五十公野信宗と改名して代わりに五十公野氏を継いだ。 翌天正９年（1581 年）、義兄の重家が上杉景勝に反旗を翻すとこれに従う。天正 15 年（1587 年）、藤田信吉率いる景勝勢に城を囲まれ、籠城中に家老の河瀬次太夫や近習の渋谷氏などが信吉に調略されて寝返るなどしたため、10 月 13 日に落城し信宗も討ち死にして滅亡し」たといわれている。

大瀬の五十公野（いずみの）氏は、新潟の五十公野氏の末裔ではないか、ということが様々な人に言われている。たしかに、現在の新潟県新発田市には五十公野という地名が残っているのに、「五十公野」という姓の人は住んでいないようだ。また、五十公野氏の一部は戦いに敗れた後、会津に逃れたとの言い伝えもあるようである。しかし、逃れた五十公野氏の末裔は、会津にはいないようである。そのようなことから、大瀬の五十公野（いずみの）氏と新潟の五十公野（いじみの）氏との関係が疑われるわけである。

大瀬の五十公野氏はいつから大瀬に居住することになったのか、それを歴史的に裏付けるものがないか、残されている史料から探してみた。

まずは、石像文化財があった。大瀬共同墓地の入り口にある常夜灯は弘化 4（1847）年に蓮海上人が寄進したものであるが、それには「為菩提　五十公野善作　仁助」と刻まれている。

大瀬共同墓地の常夜燈

2015.6.3　守谷英一撮影

五十公野仁助に関しては、『荒砥町史』の 262 頁から 243 頁にかけて次のような記載がある。「（大瀬御番所の）船荷改役に任じられた土地の人に五十公野仁助がいる。／仁助は大瀬に於ける灌漑水の不便を除かんとして、穴堰を開削し、その功労に依って上杉藩から名字帯刀御免の恩典に浴したが、勤倹力行の人として藩主の信用を得て、遂に荷改役に取り立てられたもので、慶応二年正月二日に没し、戒名は輝徳院儀光英翁居士という。」

また、同じ石造文化財に「五十公野」という生が刻まれたものとして、大瀬稲荷神社に嘉永元（1848）年の年号が記された石祠がある。それには施主として「五十公野仙蔵」と記されている（白鷹町石造文化財調査委委員会．(2010)．『白鷹町　石造文化財調査報告書』）。

さらに、文献史料としては『慶応元年　分限帳』の「御台所組次御膳部手傳共」のところに「天保七年五月　家督　　次膳部手伝　一　壱人半扶持持五俵　五十公野嘉右衛門［米沢市史編さん委員会　編，1981：103］」という記載がある。長岡は、仁助が「穴堰を開削し、その功労に依って上杉藩から名字帯刀御免の恩典に浴した」のがいつのことであるのか、またそれは何によ

ってわかるのかを『荒砥町史』には記載していない。「五十公野嘉右衛門」は仁助のことなのか、また別人なのかは確認できない。しかし、これらのことによって、近世末期には「五十公野」という姓が公に通用するものになっていたといえよう。

一方、「五十公野（いじみの）」という姓は、上杉家にとっては反逆者の姓である。その使用を、読みが違うとはいえ、たやすく許したのであろうか。かつての「新発田」に繋がる名門の復活という意味でもあったのか。あるいは時の流れというものは「憎悪の境界を越えさせるもの」であるのか。先に示した「坂家」の場合も含めて興味深いことである。（平成27年7月4日「村山民俗学会総会」口頭発表の一部を改稿）

■　黒鴨発・湯殿山参り・1

丸川二男

この8月29日と30日の二日がかりで、黒鴨から徒歩による湯殿山参りに参加した。かつて江口君や亡くなられた奥村先生と行ったことがあるので、私としては二度目になる。

前回とは時期や天気、行程などが少し違うので単純に比較はできないが、朝から夕方まで、小休止や休憩を繰り返し、昼飯を食う時以外ほとんど歩いていることだけは変わらない。

一日目は黒鴨の寺の前を朝の五時前に出立、萱野、木川を通って大井沢まで。二日目は大井沢の宿を六時半に出て、志津を通って湯殿山本宮までの行程である。帰りは車を利用したが、何といっても白鷹からの四人を含めて、ケガや故障者もなく、全員がほぼ予定通りの時間で歩き通すことができたのは何よりだった。

それにしても、参加者にそれぞれの考えがあろうことは当然だが、そもそもの発端は何だったのかと改めて考えてみると、今もすっきりとしない。前回行ったときには木川のつり橋を渡れなかったということが引っかかっていて、同行の伊藤君同様、いわゆる「道智道」といっている古道のうち、茎の峰から木川に下る道を歩いてみたいという気持ちがあったのはひとつの要因である。

むろんその前にも多少の伏線はあった。それは「あゆーむ」にいた宮本君が企画した「塩田行屋」の展示や、相応院展の最後に開かれた「道智道」のシンポジュームと、それに参加してくれた西川町の布施さんや志田さんたちの活動であるが、これらは「湯殿山信仰」について改めて考え直すきっかけを与えてくれたものであった。

たとえば私たちの周囲にはたくさんの「湯殿山碑」が建っているが、それぞれの碑ひとつにも実際に「湯殿山参り」をした人たちがいて、さらに「代参」と称してお金だけを出し、お札をもらってきてもらうという「講」があったのである。むろん徒歩によるものであったから率いた「先達」がいて、出立から脚半解きまでの一切を仕切っていたであろうことは想像に難くないだろう。

特に養蚕業の成否については神仏に頼り、祈願するしか方法がなく、失敗はその家の存立をも危うくしただけに、大井沢の旧大日寺跡に残る「養蚕満足」という大きな供養塔はその願望がいかに大きなものであったかを今に伝えるものである。

一方、「通過儀礼」といわれる中に「成人登拝」があり、ある一定の年齢になれば近くの高い山に登ることが習慣になっており、それを通過しなければその地区では「一人前」としては扱われないという話も聞いたことがある。これを単に古いしきたりと片付けることは容易だが、事柄の内容は多岐に及んでおり、今後も考えてみる価値は十分にあると私などは今でも思っている。

しかしやはりそれだけではない。私の中には、自分ではどうにも始末できない何かがひそんでいて、時々、突然に噴出してくるものがある。その中身はきわめて複雑で、曰く「言い難し」である。特にこの大震災後の世の中のありさま、この事態を生み出した時代と、それを作ってきたのはまぎれもなく自分の世代であること。それでいてまったく無力であるだけでなく、無自覚で、しかも遊び呆けているのである。こうした自分を始末するには神仏にたよるほかに方法がない。その中のひとつが自らの足で「歩く」ことなのだ。人間は「考える足」であり、「足」で考えることに気がついたのが今回の「湯殿山参り」であった。

二日間ともに雨の中で、しかも最後の山登りでは下から吹き上げてくる風に笠を何度も飛ばされたが、天気をあれこれいったところでどうなるものでもなく、素直に従うことが何よりであることを実感した旅でもあった。